



library

ここ最近、作家としてや表現について、考えたり思ったりしている事を自分自身でまとめるためにここに書き綴ってみようと思います。

そもそも、何故絵を描き始めて、その中に何を求めているのか。子供の頃まで振り返ってみて、当時は絵を描く事で自分の世界の中に逃避でき、それによって寂しさをまぎらわしたりできた。外の世界から干渉してくる様な事も、その間いの中で侵入する事を阻止できていたように思います。他者からの干渉に対してすくなく過敏で、反抗的でした。しかし、大人になって思うのは、逆に干渉されない事の方が恐ろしいという事でした。自分をこの社会の中に位置づけたいという想いもあり、「My position」というシリーズの作品ができたのだと思います。常に自分自身をアピールしていました。表現者である事は、案外その欲求を叶えてくれる、と感じたりもしました。しかし、人との交流の本質に目を向ければ、その私の居場所には「作家という仕事」であり、何かしらのフィルタを通した客観的な距離感の上にあるのだと思いました。それに対してとても空虚な気持ちになり、無鉄砲に人に近づき事も怖くなったりして、すぐ対人関係においては保守的になってきました。

普段ひきこもって、人と接する機会があまりない中、昨年の府中での公開制作は思う事が沢山ありました。自意識過剰な性格なので、最初はとて人との存在を意識して、緊張しましたが、慣れてくるとそれがだんだん麻痺してきました。人との距離の取り方がだんだん無感覚になっていって、楽になっていきました。社会的に与えられた環境に自分が組み込まれている安心感もあったし、一人の世界で悶々とする事もなかったで、その一時期は孤独や寂しさから離れている事ができました。でも、それが期間限定の事であり、公開制作が終わったあとは、それがいきなり遮断された事で、その落差に対して愛に落ち込みました。府中で思き上げた作品を自分で振り返ると、絵が私から若干、自立しているように思えました。私が絵の中に逃避したりしなくても寂しくなかつたからではないか、と描き表現者は孤独でも自分の世界を崩してはいけないうような気がするからです。そのパランスの取り方をちゃんと察かないと、うまく生きていけないのです。人が沢山いるこの世界を、「個」の自分を意識して見渡したら、私は今までやってきた自分と他者のデーマに何か埋められない限界みたいな物を感じました。ちようどその時期にカフカを読んでいた、年末からしばらく実家に帰っていました。実家には間逆な世界を体感したい、という衝動にかられました。人がいる中で孤独を感じるのであれば、いない場所ではどうなのだろう？と。結果、樹海が思い立ちました。かなり怖くて、不謹慎な話ですが、自殺の意識にも若干興味がありません。死という孤独を選択するという事は、逆説的にその孤独からの逃避でもあるのではないかと、奇妙な気持ちになりました。木が沢山そこにあるだけなのだけれど、逆に「いない」という存在が色濃く感じられて、奇妙な気持ちになりました。人が沢山いる雑多な都会の中にいると、自分自身も誰も埋もれてしまって、存在そのものが埋没していったイメージですが、実際は、この都会の方がむしろ「樹海」なのではないかと思っていました。一回、ギャラリ一棒での個展では「いない」とか「不在」をテーマにしようとしていますが、私自身が「いない」事を否定したい足掻きなのかもしれません。ここまでが現時点の自分の想いです。正直、それを表現する事で何が現れてくるのか、自分にとってどのような意味があるのか、よく分かりません。結局は一人の人間として生の暖かいコミュニケーションを求めているのですが、それを表現に置き換えるとは何故か陳腐になってしまうジレンマがあります。誰も100%分り合う事なんて不可能ですが、今、作家としての私はスランプなのだと思います。カタログ作るにも、完成度の高いものを作れるか自信がありません。変にまとめた理屈で強引に推し進めるのは良くないと思うので、等身大の自分をできるだけ分けたいように努力してみます。たぶん、今とても中途半端な過程に立っているのだと感じます。いろいろな事がありますが、お休みの事、足跡として、この右往左往な状況も